

価値尺度機能と価格の度量基準機能

——天沼説への私見——

小 牧 聖 徳

天沼教授は「金（貨幣）の価格」と題する論文において、金の価値尺度機能と価格の度量基準とを同一視して、価値尺度機能即ち価格の度量基準であるとの見解を強調せられた。さらに同教授は金融学会秋期大会においても同じ趣旨の報告をされた。金融学会での質問において一応明らかにした私見を、さらに明確な形で表明するのが天沼教授に対する責務でもあるので、本稿では教授の見解を検討し、あわせて私見をのべたいと考える次第である。

—

教授の強調されるところによれば次の如くである。「金一オンスが含む一〇労働時間という価値は、いつでも金一オンスという重量名と固定的に結びついていることになる。そしてこのことは仮に金一オンスの価値が変化したとしても同じである。いま金一オンスの価値が五または二〇労働時間に増減したとすれば……かくて一オンス

の五または二〇労働時間という価値はやはり固定的に一オンスと結びつかざるを得ない」(経済評論十一月号、一四二頁)と。すなわち一オンスの金で表示される価値はいつでも一オンスの金重量と結びつくといわれるのである。そして「商品価値と金価値との等置が商品価値の金量による表現に不可欠な前提とされる限り、金価値の変動と無関係に(俵点引用者)、商品価値は直接金量をもって表現されることにならざるを得ないのであって、金の価値尺度機能と価格の度量基準機能とを区別する理由は何もないのである」(同上書一四二頁)といわれる。商品価値が金量で表現される場合には、それは金量で即ち金の一定量で表現されるから、それ故に金の価値尺度機能と価格の度量基準機能とを区別する理由は何もないといわれる。ここで教授は金価値 \parallel 金重量 \parallel 価格の度量基準として金重量を媒介として金の価値尺度機能と価格の度量基準機能を統一して、金重量においてとらえて両機能を区別する理由はないとされるのである。金の機能をいう場合に金重量の機能が語られて金重量が金重量として価値尺度機能や価格の度量基準機能を果すとするのは、金重量は単なる金重量ではなくて、特殊な商品であるということを前提とした金重量であることを無視した見解であるといわなければならない。金が特殊な商品であること意識的に無視して、いきなり金重量から出発して教授は金量による表現は金価値の変動とは無関係であるとされる。まずここでは、金は生産物としての金であるのか、特殊な商品としての金であるのかすら問題とならず金重量だけが問題となっているのである。しかし、ここでは教授は無視されてはいるけれども金は特殊な商品であるから、(次には金は特殊な商品であることを確認せられている)特殊な商品である金が他の商品と等置される場合においては金価値の変動によって、金価値が減少すれば、減少した金価値で表現される商品価値はより多くの金量で表現され、逆の場合はより少ない金量で表現されるから、金量による表現は金価値の変動とは必ずしも無

関係とはいえないのである。かかる金量による表現を可能ならしめるのは金が特殊な商品として他の一般商品と等置されるべき共通なものである。ここには金の価値尺度機能があらわれることになる。金の価格の度量基準機能はかかる前提においてのみあらわれるのであり、両者は概念的に別であって区別されなければならぬのである。教授は「金の価値尺度とは予め金の価値を前提として、しかる上でこれと等量の商品価値を金量で表現することではなく、交換過程において実際に商品価値を金の一定量で実現した結果をいうのであり、金の価値を予め前提することは、そもそも『資本論』冒頭において商品の価値実体を生産過程の媒介なしに説いて了ったマルクスの方法論上の誤りであるという説明にその解決を求めても満足すべき答は得られないであろう」（同上書一四三頁）とされ、その理由としては「金の価値尺度機能を購買手段としての金に与えれば、商品価値と金価値との等置は現実的な等価交換となり、ひいては金価値の金量に対する固着も現実化することになるだけである」（同上書一四三頁）とされる。ここで購買手段としての金があらわれてくれば、商品価値と金価値との等置は現実的な等価交換となり「金価値の金量に対する固着も現実化することになるだけである」といわれるのであるが、金価値と金量との関係において、金価値が金量において固着して、現実金量で金価値が表現されることが、金が他の商品価値を尺度することは同じではない。金価値が金量で表現されるということは、特殊な商品である金そのものに関することがらであり、他の商品との間に何らの関係をもたず金それ自体において、その価値が金の一定重量で示されることを意味するのに対し、金価値が他の商品価値を尺度するといふ場合には、金と他の商品との関連においてのみ成立するのであり、他の商品との関係を無視しては他の商品の価値をはかるという機能は生じ得ないはずである。いかえれば金価値が金量で確定されるということと、金価値が他

のものの価値をはかることは同じではない。前者は金の一定量にドル、ポンド等の称呼をつけることであり、後者は他の商品価値を金価値によって尺度して、金量において表現することであり、金と他の商品との相互関係において成立するものである。その結果として、一定の金量で表示される商品価値は、その金量をポンド、ドル等の貨幣称呼でよぶことによって商品価値の貨幣称呼、即ち価格となる。

教授は価値尺度を前提とせずいきなり価格の度量基準をとりあげられ、そしてそれをば価値尺度そのものだと いわれているようである。教授のいわれる価値尺度とは実は価格の度量基準のことにはかならない。この価格の度量基準とは金の一定重量を確立してそれを貨幣名称として呼ぶことであり、金そのものに関することであり、それは他の商品との関連なしに、金それ自体において成立することが可能である。既に見た如くに、教授は金価値 \parallel 金重量と考へておられることは明らかであり、価値 \parallel 重量から、重量に重点をうつして、不変の重量は、不変の価値と考へられ、不変の重量が価値として価値尺度機能を果すとされ、価格の度量基準との混同が生じ、価格の度量基準が教授においては価値尺度機能にねじまげられるのである。そしてその媒介をなしたのは金重量なのである。

しかし商品価格を金重量単位で即ち固定した価格で表現することは、おもりで重さを、物指で他の長さを、すなわち固定した量で、他の不確定な量を測ることであり、その場合もし金重量が価格の尺度として作用しようとするれば、金重量によって価格をはかられるべき商品も、何らかの価格をもつものとみなされなければならない。その価格は金と交換されることによって確定する価格であつて、金と交換される前には確定することのない価格である。しかもそれが金によって確定されるべきある価格をもつものとして市場に出現するのであれば、金重量

がその商品の価格を測定するためには、測定されるべき商品価格も重量化されているか、さもなければ金と商品に共通した何ものかがなければならぬ。それがなければ重量で重量は測れても、重量で価格をはかることは出来ない。したがって両者に共通する価値を前提とせずしては、金の価格の尺度としての機能は、その機能を如何に果そうとしても果すことは不可能といえる。したがって金と他の商品との関係をぬきにして、単なる重量としてとらえた金をもって価値尺度機能と価格の度量基準を論ずることは前提ぬきの論理の飛躍で、それ自体無理であり、金の重量では、かかる機能は問題となりようがないといわなければならない。

それにもかかわらず現実に金重量が価格の尺度として他の商品価格を確定するとすれば、金重量と他の商品との等置を必要とする。その場合に成立する交換は極めて偶然的な比率のものとならざるを得ない。けだし交換以前には商品はこの場合、価格をもっていないのであり、これは価格なしの商品と金重量との偶然的な交換にすぎない。このような偶然的な交換を出発点とすることは金が未だ貨幣商品になっていない場合の交換に照応するのであり、この場合、金は交換によって初めて商品となるもので、産金業者が自己の生産物金と他の商品とを交換する場合にあてはまる。この場合には商品所有者は、販売者として金を手に入れるが、他方、産金業者は、この場合他の商品を購入したのではなく、他の商品と生産物金とを交換したのにすぎないといえる。けだしこの場合、金は商品にはなるが、貨幣であるか否かは未確定である。そこで生産物金が商品金となり、それが貨幣金になる過程を追せきしなければならぬこととなるが、教授はそれらを不明確のままにして、いきなり、金重量において、金の機能を語られるのである。この場合の金はいかなる金であろうか。教授が金重量に力点をおかれている点よりみて、教授における金は貨幣金ではないようである。けだし金重量は自然形態において存するもので、この場

合の金は使用価値としての金ではあり得ても金と他の商品との交換関係は金そのものからは必然的に問題とはなり得ない。この場合の金は商品にはなり得ても、貨幣金には程遠いといわなければならない。天沼教授が「金の価値尺度機能と価格の度量基準とを区別する理由は何もないのである」といわれるその金は金の重量であつて、その金は生産物としての金か、商品としての金か、或は又貨幣金をさらに明確にしなければならない。この点をぬきにしては金重量の機能は語れても、金の機能を論ずることは論理的な大飛躍である。社会性をおびた金と重量としてとらえられた金とは、その機能は一方は社会的作用を果しうるが、他方は自然的作用しか果せない。たとえ金重量が社会的には重量として作用するとしても、価値として作用するためには金重量としてではなく、商品としてあらわれなければならないのである。そこで教授はつぎに金重量ではなく、商品金を問題とされ、価値形態を論じて、商品金が価格をもつことによつて貨幣商品になるとしてそれを論証されようとするのである。そこでつぎにそれを検討しなければならない。

二

天沼教授が引用された「いかなる商品も等価としての自分自身には関連し得ず、従つてまたそれ自身の自然的外皮をそれ自身の価値表現たらしめることはできないから、その商品は等価としての他の商品に関連しなければならない」(資本論、日評版二一九頁)「一商品の等価形態はむしろ何等の量的な価値規定をふくまない」(同上書二一八頁)というマルクスの言葉は、等価形態は他の商品との関係においてのみ、かかる関係の内部においてのみ等価となることを示すものであり、それみずからが価値を表現するには、それ以外の「他の商品に関連しなけれ

ばならない」のである。教授はこの「一商品の等価形態はむしろ何等の量的な価値規定を含まない」という命題を検討されて、相対的価値形態と等価形態に立つ商品をも同一の商品におき「いかにも上衣一着は上衣一着に等しい」ということは無意味である。しかしそれが無意味な重複語であるのは上衣が価値形態の外部にある場合だけではなからうか？」（経済評論一四四頁）と疑問を提出されている。価値形態の外部にあるとは、価値形態をとらざるを得ない商品交換の外にある場合、すなわち単なる生産物としての交換、使用価値と使用価値との交換をさしおられるのであらうと思われる。そうすれば同一使用価値を交換することは、たしかに天沼教授のいわれるように無意味であらう。しかし「価値形態の外部にある場合」に無意味であるとされる上衣一着と上衣一着の交換が、価値形態の内部でならば意味をもつとされるならば、これは商品交換においては意味があるとされるものと解する以外には仕方がない。そうすると商品交換においてならば、同一商品と同一商品の交換は意味があるとされるようである。その場合に意味があるのは商品が相対的価値形態にあると共に等価形態にあるということをし、同一商品において示しうるということに意味を見出されているからであり、その結果として一着の上衣 \parallel 一着の上衣の方程式において「上衣がひとたび価値形態における等価の極に立つならば上衣はもはや単なる使用対象ではなく、この使用対象それ自身が同時に価値の姿態、すなわち正に感覺的でありながら同時に超感覺的なものに転化しているのであって、しかもかかる転化が可能なのは価値形態の内部だからこそである」（同上書一四四頁）といわれる。

価値形態の内部だから上衣一着と上衣一着の交換に意味ありとされるのは、商品交換において同一商品の交換が意味ありとされるのと同じであり、同一商品と同一商品が商品として相互に交換されるということは非現実的

であり、この前提そのものが極めて観念的なものといえる。そして同一商品の交換はそれが商品として交換されるならば、いわば価値形態として現象する商品交換においてならば、意味があるとされるのは極めて奇妙であるといわなければならない。けれども教授が意味ありとされるのは上衣一着 \parallel 上衣一着という方程式は同一商品が同時に相対的価値形態と等価形態に立ちうるということを示しているという理由をもって、意味ありとされるのであろうが、商品交換における同一商品の交換というのはその前提自体が既にのべたごとく非現実的であり、かかることも観念的に考えられるというにすぎない。

しかしながら教授は「いかにも等価商品上衣は自己を積極的に表現する立場にはない。けれども亜麻布二〇エルの価値を自分自身に等しいものとして表現することにより、上衣一着はこの二〇エルの亜麻布の価値と等しい自己の価値をも、上衣一着としておのずから必然的に表現せざるを得ない。かくて上衣一着（の価値） \parallel 上衣一着という方程式は無内容な重複語どころか、等価商品そのものの端的な表現なのであって」（同上書、一四四頁）と主張されるが、これは上衣は自然的形態において交換価値として現象する価値であるということ、即ちいかにすれば上衣は使用価値であると共に価値であるということであり、これは商品は使用価値と価値との統一物であるということ、「簡単な価値形態」を独自に書きかえて再確認されたにすぎない。そして「上衣一着（の価値） \parallel 上衣一着という方程式は無内容な重複語どころか、等価商品そのものの端的な表現なのであって、ひいては金が価格をもつことは（金一オンスの価値 \parallel 金一オンス）、正に金が貨幣商品（傍点引用者）たることの本来的な姿である」（同上書一四四頁）とされるのである。ここで上衣一着の価値 \parallel 上衣一着が等価商品そのものの表現であるならば、金一オンスの価値 \parallel 金一オンスも等価商品そのものの表現であるといえるかも知れない。しかし

それが貨幣商品たることの本来的な姿であるといいうるためには、かかる等価商品は一般的等価商品にまで発展しなければならぬ。しかしここで教授はそれにはふれることなく、等価商品と貨幣商品とを同一視することによつて、貨幣商品金が等価商品であることを、ここでは確認されているのである。それはともかくとしても、上に引用した教授の見解のなかには「金が価格をもつことは正に金が貨幣商品たることの本来的な姿である」ということと、「金が価格をもつことは（金一オンスの価値 \parallel 金一オンス）」という表現で示されるということ、二つの問題がふくまれているようである。

まず「金が価格をもつ」ということが教授においては（金一オンスの価値 \parallel 金一オンス）として示されているが、これは教授の主張からも察せられるごとく、金の価値が金の自然形態で表示されるということであり、そこから金価値 \parallel 金重量として考えられ、そして「金について価値尺度機能と価格の度量基準機能とを区別しなければならぬ根拠は何もなく、かかる区別が誤りであることは明らかである」（同上書、一四四頁）とされるのである。この方程式を根拠として価値尺度機能と価格の度量基準機能との一致、同一性を金重量を媒介として主張せられるのであるが、この方程式とともに、教授は「金が価格をもつことは、正に金が貨幣商品たることの本来的な姿である」とされている。これは金が貨幣商品であるためには本来、価格をもたなければならないという意味に解せられる。ここに教授の価格の度量基準機能重視の見解がうかがわれるが、しかし「金が価格をもつことは」とは金が商品であるが故に、他の商品との交換によつて、他の商品によつてその価値を表示され、（この場合、他の商品が金の等価形態の立場にある）、そこに他の商品による金価値の表現を通して、金の一定重量が一定の価値と同一視され、価格の度量基準の確定にもとづいて、金それ自身を呼ぶ場合に、ポンド、ドル等として

あらわれるのであり、一般商品がポンド、ドルとよばれるのと同じく、「価値の貨幣的表現」を商品金においてみた場合に「金が価格をもつ」というるにすぎない。いわば「金が価格をもつ」とは金の一定重量が重量名に源をもつ貨幣称呼で表示されることであつて、それは金それ自身を目方ではなくて貨幣称呼で表示する称呼の問題にすぎないといわなければならない。

「金が価格をもつことは正に金が貨幣商品たることの本来的な姿である」と教授はされるが、「金が価格をもつことは」金が他の商品と同じように価値として貨幣的表現をうけることであり、金が商品たる以上さけられない、商品たることの本来的な姿ではあるとしても、「貨幣商品たることの本来的な姿」なのではなくて、金が一般的等価物であることが、「貨幣商品たることの本来的な姿」なのであるといわなければならない。

三

以上のように天沼教授は金を金重量においてとらえ、つぎに金を商品としてとりあげて、最初の金重量は実は商品金の重量であつたことを論証される。そこで金重量において論ぜられた金の機能は、実は商品金の機能であることが明らかとなる。この商品金の機能において商品金が金重量でみずからの価値および価格を表示し、商品金が価格をもつことによって、貨幣金になるとされ、商品であるべき金が他の商品とは独立に、その重量によつてみずから価値尺度即ち価格の尺度に転化し、けつきよく金は商品であるよりも重量であることによつて、貨幣であるかの如き論理が展開される。すなわち教授は「貨幣形態に不可欠な前提が商品価値と金価値との等置にある限り、仮りに金価値が生産力の変化に基づき変動しても、金一オンスの価値は常に金一オンスとして表現され

るから、商品価値は金価値の変動にかかわりなく、直接に、しかも常に金重量をもって尺度・表現されることは明らかである」（同上書一四四頁）として商品価値は直接に、「金重量」で尺度・表現されるとされる。これは商品価値が価値によってではなくて、重量で尺度・表現されるということであるが、尺度されるといふことと表現されるといふことは同じではない。価値を価値で尺度することは出来るけれども、価値を重量で直接尺度することは出来ない。もし「直接に、しかも常に」重量で尺度・表現されるとするならば表現されるべき商品もまた重量でなければならない。そこで教授は金価値を金重量と同一視したのと同じように商品価値をも重量化する必要にせまられることにならざるを得ない。しかし商品価値を直接重量化することは出来ない。したがって当然、商品を労働の生産物として労働時間によってその価値の大きさを規定し、一定の価値として、それを他の価値即ち金価値と関連させて価値の大きさを確定し、それを金重量によって表現するということにならざるを得ない。したがって正しく表現するならば、価値が価値で尺度され、それが金重量で表現されるのであって、金重量で表現されるためには、表現されるべき価値を価値で尺度することを前提として必要とする。したがってここでも価値尺度機能は貫徹しているといわなければならない。教授は本来、金と他の商品との関係においてみるべきことながら、関係においてよりも、金そのものにおいて独立的に把握して、金重量としてまずとらえ、それを単なる重量としてではなく事実上、価値としてとりあつかわざるを得ないにもかかわらず、しかもなお、それを価値としての金ではなく「金重量」であると強調しておられるのである。

つぎに教授はこの「金重量の単位」が価値の外在的尺度であるといわれる。即ち「貨幣形態のもとにおいては、金の重量単位（オンス）が、そのまま商品価値の大きさの尺度基準となつてゐるということである。あるいはマ

ルックスの叙述を援用すれば、商品価値の大きさの内在的尺度が労働時間であるのに対し、金の重量単位（磅点、引用者）は労働時間の現象形態として外在的尺度になっているということである」（同上書一四五頁）と。ここでは「金重量単位」が価値の外在的尺度としてとりあげられているが、教授の引用せられたマルックスの叙述は正しくは「価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度たる労働時間の、必然的な現象形態」（資本論Ⅰ、二九九～三〇〇頁）なのである。すなわち労働時間は商品価値の内在的尺度であるが、労働時間の現象形態であるのは、「価値尺度としての貨幣」なのであって、教授のいわゆる「金の重量単位」が労働時間の現象形態としての外在的尺度になっているのではない。資本論では金が貨幣商品と前提されているのであるが（資本論前掲書Ⅱ九九頁）、貨幣商品としての金と単なる重量単位としての金とは、その自然的形態は等しく金であっても、その性格は全く異なっている点を見落してはならない。金重量単位は貨幣商品を前提としてのみ金重量単位としての社会的意味があるのであって、単なる金重量単位では物理的現象にすぎない。

元来、金の重量単位は金の自然的属性に関することがらであり、金それ自身において生ずることがらであるが、貨幣商品としての金は、他の商品と交換されるべき運命にあるものとして、他の商品との関係を無視しては金は貨幣商品たり得ない。それ故、金の自然的属性にそなわる「重量単位」をとらえ、それを重視して「重量単位」が労働時間の外在的尺度であるというのは、金を単なる生産物として把握しているためであって、貨幣としてとらえているのではない。金と貨幣との関係は、金それ自身は必ずしも貨幣ではないが、一般的等価商品としての金は貨幣なのである。したがって教授が「金の重量単位は労働時間の現象形態として、その外在的尺度になっている」といわれるためには、この「金の重量単位」は単にその自然的属性が金であるということのほかに、それ

が一般的等価商品としての金であるということが、まず前提されなければ教授のいわれるような「金の重量単位（オンス）」が、そのまま商品価値の大きさの尺度基準」（経評一四五頁）とはなり得ない。

さらに教授は「金重量単位」を重視して「同じく貨幣形態のもとにおいては、金重量単位（傍点、引用者）は価値実体のない単なる名目として自立的に商品価値を尺度・表現しているということである」（同上書一四五頁）として再び「金重量単位」が商品価値を尺度・表現するとされている。しかしこれも既にみた如く一般的等価商品としての金が重量としてではなく、価値として他の商品の価値を尺度するという前提においてのみ、金重量が商品価値を表現するとすべきであろう。ここでも「金重量単位」という表現の中に、「金重量単位」重視、したがって価格の度量基準重視の見解がうかがわれる。そして「金重量単位」という表現の中に、金を貨幣商品としてよりも、むしろ生産物としてとらえていられる見解がうかがわれる。

さらに「金一オンスの価値は金一オンスだということの謎は、貨幣形態という抽象的な形態面をいくら論理的にこねまわしても決して解けないということである」（経評一四五頁）といわれるが、金一オンスの価値は自然形態における金一オンスであるということであり、これは金が価値と使用価値の統一体である商品であることをも物語っているのである。かかる商品金が故に貨幣金になるかという過程の追せきは、商品から出発することによって、明らかにされるのであり、金を生産物として把握する立場から出発する限りは、一般的等価物としての商品は把握出来ないであろう。すなわち使用価値と価値の統一体としての商品が必然的に交換価値として現象して、価値形態の発展において貨幣形態の成立になるという論理にはならず、生産物が即ち使用価値が他の商品もしくは使用価値と交換されて、一方の使用価値は金であり、それが他の使用価値もしくは商品と等置され、両

者の対比において価格として、他の商品価値を表現することとなる。そこで金を生産物として考えるか、金を特殊な商品として考えるかという点に問題があると思われる。教授はある時には金を生産物と考えられ、他の時には金を貨幣と考えられ、生産物金と貨幣商品金との間を徘徊していられるように見受けられるが、けつきよく金は生産物であるという立場から出発されているが故に、生産物金は、その重量によって価格表現をうけ、その重量即金価格が、不変なることによって価格の尺度たることを強調される。そして一定重量の金を生産するコストを問題とされ、それは常に不変的に固定化されているといわれるのである。

以上のように教授は金を金重量においてとらえ、金重量が価値尺度機能と価格の度量基準とを共に果すとして、両機能の区別を認めないという立場をとり、つぎに、金を商品としてとりあげて簡単な価値形態を同一商品の交換において書きかえることによつて、最初の金重量は実は商品金の重量であつたことを論証される。そこで金重量において論ぜられた金の機能は、実は商品金の機能であることが明らかとなる。この商品金の機能において商品金が価値として存在するためには重量と結びつくとして、金重量に重点をおいて、商品金重量 \parallel 金価値、および商品金重量 \parallel 価格の度量基準により価値尺度機能と価格の度量基準の統一が商品金重量において完成するのである。しかし「金重量における「重量」は元来、物理的現象ではあつても、社会的現象ではない。金重量として価格の尺度としての機能を果しうるのはそれが単に金重量なるが故ではなくて、貨幣商品であるということを前提とした上で話である。その前提より以上に「金重量」を重視するのは、「金重量」という現象にとらわれ、その背後にある本質を見ない見解という外はないのである。しかし、それはともかくとして、教授は商品金の機能において商品金が、金重量でみずからの価値および価格を表示し、商品金が価格をもつことによつて貨幣金に

なるとされ、商品であるべき金が他の商品とは独立に、その重量によってみずから価格の尺度に転化し、けつきよく金は商品であるよりも、重量であることよって、貨幣であるかの如き論理が展開される。ここに他の商品との関連が消失しても、なお金は金重量において貨幣機能を果すこととなるのである。それ故けつきよく金重量の金は具体的な金そのものであって、それが商品としての金であろうと、貨幣としての金であろうと或は使用価値としての金であろうと、ここでは具体的な金が問題とされているのである。しかし生産物と商品とに差別がある如く商品と貨幣商品にも差別がある。生産物、商品、貨幣商品における同一性と差別性において、その差別性を追求することなしに生産物金、商品金、貨幣金を金なるが故に金重量において同一視するのは、それらに共通する同一性において即ち生産物として把握していることに外ならない。それ故、教授の金はけつきよく、生産物としての金であったことになる。それにもかかわらず生産物としての金において貨幣商品の機能が語られているのである。

金の価値尺度機能、価格の度量基準機能が問題となるのは、金を貨幣商品として把握するが故であって、単なる生産物として把握する場合には、貨幣機能の問題は生じてこない。けだし生産物は商品とはなるが、必ずしも貨幣商品であるとは限らないからである。教授においても金を貨幣商品として取あつかうならば、それは一貫して貨幣商品として取扱われるべきではなかったであろうか。そしてまた単なる生産物金として取扱われる場合には、（現に金重量としてとらえることによって、自然的姿態の金としてとらえられている）貨幣金に固有の価値尺度機能とそれより生ずる価格の度量基準については金が生産物として把握されている限り、貨幣機能としては問題にはならないのであるから、ふれない方が、かかる両機能の混同もしくは意識的同一視は、さけられたにち

がない。金が貨幣であり、また生産物でもあるところに問題の根源があるといえるが、生産物としての金において価値尺度機能と価格の度量基準機能を論じてそれを同一視し得ても、貨幣金の機能においてはかかる両機能を同一視することは出来ない。けだし生産物金と商品との交換は偶然的な交換において成立するのに対し、貨幣商品金と商品との交換は、貨幣成立を前提とした交換であり、生産物金と貨幣金とは、その自然的形態をたとえ等しくしているとしても、その本質において必ずしも同じとはいえないからである。生産物と貨幣商品とは明確に異なる概念であるから、生産物金と貨幣金とは明確に区別されなければならないのである。

教授の考え方は、金は金、商品は商品として別々に考察され、一般商品と金との相互関係をみる場合においても、金は貨幣商品としての金ではなくて、生産物としての金であり、したがって生産物金と商品との交換においては、商品が貨幣に生成する論理は問題とはならず、まず金が生産物として立ちあらわれ、生産物金は一定の重量単位として価格をもつことによつてはじめて貨幣になりうることになる。したがって生産物金から出発する限りは金が一般的等価商品として価値尺度機能を果すということは把握出来ないことになる。教授の問題点は、貨幣金を問題とするつもりで、実は生産物金を問題にしていることに気づかず、貨幣商品金を問題にしていること、信じていられることである。そして生産物金を貨幣商品金とみなし、その金を重量においてとらえることによつて、実は生産物に逆もどりしているにもかかわらず、なおも貨幣商品の機能について語っていられるのである。

四

金が貨幣商品である場合は勿論、生産物としてとらえられている場合にも、それと交換される商品との関連に

において、一般商品の価値と金の価値との交換比率が問題となり、それは金および他の商品の生産力の変化と密接なつながりをもつ。教授はこのうち商品の価値について、その大きさを規定する労働時間について問題をなげかけておられる。特に社会的必要労働時間の概念を具体的に考えられ、それは具体的であるとともに抽象的、一般的な概念であることを無視され、特に生産諸条件と生産力とを同一視した主張を展開されている。

教授はまず「社会的必要労働時間」という概念を問題とされて次のようにいわれる。すなわち「時間によってはかられるものとする社会的労働量」社会的価値は、特定の具体的労働が占有する生産諸条件（生産力）と固く結びついたまったく具体的な概念である」（経評十一月号、一四六頁）と。ここで生産諸条件と生産力とを同じものの如く考えていられるやに見受けられる表現がなされている。生産諸条件とは生産に関する各種の物的な具体的諸条件をなすものとして、極めて具体性の高いものといえるが、生産力とはそれらを前提とした生産の能力として、より抽象的、一般的な概念に属する。それはともかくとしても、教授は「社会的必要労働」社会的価値は、特定の具体的労働が有する生産諸条件と固く結びついた、まったく具体的概念である」（経評一四六頁）として、社会的必要労働を具体的な生産諸条件と固く結びつけて、まったく具体的概念であるといわれるが、生産力と結びつけられるならば、それは抽象的、一般的な概念でもあるといわなければならない。教授はしかし、ここでは具体的概念であると断定されることによって、その実証主義的立場を主張されているようである。そして「社会的必要労働時間」が具体的概念であるとされる例証として、イギリスにおける産業革命前と、その後における紡績工場の例を出されて、それぞれ「労働量として実存」であるとされる（農業と鉱業は例外とされている）。

しかし、この「社会的必要労働時間」というのは、交換価値として現象する価値の大きさを規定するものを問

題とする際に出てくる概念であつて、その場合、対象になつてゐるのは商品一般（單純商品であり、資本家的商品でもある商品としての一般性、即ち商品一般）であつて、イギリスの紡績工場の例は、その一具体例にすぎず、かかる具体例を示すことによつて、むしろ一般的傾向を示したものと見える。即ちこの例では、技術革新の結果「社会的必要労働時間」が単位当りの商品にとつては減少する傾向にあることが示されてゐるのであつて、それを通じて「社会的必要労働時間」は決して社会的、歴史的に固定したものでないことを、すなわち時と処でそれは異なるものであることを示してゐるわけである。ここでの取り上げ方は対象も商品一般であるのと同じく、一般的傾向が問題とされてゐるのであつて、教授が強調される実存、現存そのものが問題ではなく、かかる実存、現存を例として一般的傾向法則が論じられてゐるのである。したがつて実存、現存の見地から「社会的必要労働時間」を具体的、固定的なものとしてとりあげるのは、一般的に論じられてゐる中へ、いきなり具体的なものをもちこみ、その具体的なものにとられすぎた見解であるといわなければならぬ。

しかし教授は「社会的必要労働量はこのように一定の現存の社会的、平均的、標準的な労働主体と労働条件とを前提としたものである以上、この標準的条件からはずれた労働主体と、労働条件のもとで生産された生産物は、標準的条件のもとで生産された生産物と同一量、同一質のものであつても、社会的必要労働量を対象化してゐない」（経評一四六頁）からとして、標準的条件を具体的なものとしてとらえられ、そこから社会的必要労働時間を具体的、固定的に考へて、それより生産力のすぐれたものと、劣つたものをとりあげて、それぞれの商品の個別的価値と「社会的必要労働時間」との差を問題とされるのである。しかし社会的必要労働時間は商品一般のもつ一般的傾向法則であり、具体的・実存それ自体ではなくて、それを媒介として商品一般のもつ一般的傾向こそが

問題とされているのであると解すべきではなからうか。けだし商品一般の一般的傾向なるが故に、交換において交換価値として現象するその価値の大きさが、かかる交換成立そのものを前提とした上で、とりあげられているのであり、しかもここでは（資本論、日評版一四五頁）個別的価値が社会的必要労働時間よりも高い場合、高い個別的価値は社会的必要労働時間によって規定される一般の傾向が示されているのみであって、逆にこの社会的必要労働時間を中心として、それよりも低い個別的価値と社会的必要労働時間との差異が問題にされているのではない。

なるほど教授がここでとりあげられているように同一産業部門内で高い個別的価値のものとは低い個別的価値のものがあることは事実であるとしても、それらの社会的価値は、その産業部門の商品に対する需給関係を通じて、低い個別的価値に近く定まる場合も、高い個別的価値に近く定まる場合も生じるわけであり、かかることの生ずるのは、他の産業部門との関係において、社会全労働における労働の配分状況において、その部門全体が、他の産業部門とくらべて相対的に多くの労働がその部門に投下されておれば、社会的には不必要な労働として、価値としては計算に入らず、相対的に低く評価され、逆の場合は高く評価される。

したがって全産業部門の一部門としての特定産業部門の、さらにその内部における個別企業の商品価値の相対的大小は、技術的な意味での社会的必要労働量のほかに、社会的、交換的に必要とせられる必要労働量とにおいて、社会的必要労働量が規定されることとなるのであり、現実には、かかる社会的必要労働量に一致しようとする傾向法則が、商品交換においてはたいてはいるけれども、社会的必要労働時間による商品価値の規定は、傾向法則としてあるのであって、生産の技術的、且つ具体的な標準条件という観点のみからとらえられるものでは

ない。したがって標準的な生産条件と、そうでないものとの生産条件の差異のみを根拠とする個別的商品価値の相対的大小の比較は、「社会的必要労働量」を技術的のみ解し、具体的、固定的に把握しようとするものであるといわなければならない。社会的必要労働量は、かかる一面的なものではなく、すぐれて社会的、交換的の意味をもつ一般的傾向法則なのである。

しかし教授は「そもそも社的¹必要労働時間の、社会的必要労働時間たる所以は、それが単なる自然的労働時間と異なり、その後²に一定の生産諸条件（生産力）をふまえた具体的概念たるところにあつた。だから社会的必要労働時間を単なる労働時間に還元してしまうことは、生産諸条件を捨象することに外ならないのであつて、このように社会的必要労働時間から、生産諸条件（生産力）を捨象しておきながら、これについて再び生産力の變化を云為することは明らかに背理である」（経評一四八頁）といわれる。ここで教授は、社会的必要労働時間は単なる自然的時間ではないという両者の概念上のちがいを問題とされ、社会的必要労働時間は生産諸条件と結びついた概念であることを強調されるのであるが、その反面、その生産諸条件を捨象すれば、残るのは自然的時間のみが残るかの如く考えておられるようであるが、生産諸条件を捨象すれば生産力が残るのであつて、自然的時間のみが残るのではない。ここで生産諸条件と生産力との同一視がある。

具体的な生産諸条件は、具体的な労働力との結合において現実に生産をおこなうこととなるのであり、生産力は両者を統一した概念であり、それは具体的なものであると共に、具体的なものを根拠とする一般的概念でもある。

この生産力において生産力と生産諸条件とは関係ありとはいえ、同一視することは無理である。生産力におい

て生産諸条件の変化を語ることは出来るが、生産諸条件を無視して言えば生産は行い得ないし、したがって生産力そのものすら問題となりようがない。生産力において生産諸条件を捨象するということは、生産諸条件をないものと考えたというのではなく、それは抽象して生産力の概念の中に吸収し、一般化することなのである。それを恰も生産力において生産諸条件を捨象することは、生産諸条件をないものと考えたという風に解して、残るものは労働力のみであるというように解することは意識的な曲解とさえ感じられる。それ故、生産諸条件の捨象は生産力を捨象することと必然的に結びつくものではない。教授が「社会的必要労働時間から生産諸条件（生産力）を捨象しておきながら、これについて再び生産力の変化を云為することは明らかに背理である」といわれるのは、教授の言葉そのものが背理であるといわなければならない。

教授はさらにマルクスの言葉を引用して、マルクスが「価値の大きさは生産力の変化に逆比例する」といいたがら、その数頁後で早くも『生産力は労働の具体的・有形的な形態に属するものだから、この形態が捨象されるや否や、もはや労働には影響しない。だから同じ労働は生産力がいかに変動しようとも、同じ時間内には常に同じ大きいさの価値を生み出す』（資本論、日評版Ⅰ一九五頁）というまったく反対の命題をのべたのである。（経評一四八頁）とされている。しかしこれは教授のいわれるように、まったく反対の命題をのべているのではなくて、同じ命題をのべているのであって、「価値の大きさは生産力の変化に逆比例する」とは、一商品の価値は生産力の上昇につれて低下し、逆の場合は逆であるということであり、「生産力は労働の具体的、有形的形態に属するものだから、この形態が捨象されるや否や、もはや労働に影響しない、だから同じ労働は生産力がいかに変動しようとも、同じ時間内には常に同じ大きいさの価値を生み出す」というのは、同じ時間内には常に同じ大きいさの価

値を生み出すが、それは同一時間内に異なる分量の諸使用価値を調達するが故に、単位当りの商品の価値は相対的に減少するということを意味しているのである。生産力と生産諸条件の同一視乃至曲解は、同じ命題を反対の命題において理解され、全く逆の主張をされている。そして、「抽象的な商品価値、あるいは、その大きいさの単なる尺度としての労働時間は、商品の具体的な生産諸条件を捨象した概念であるから、生産力の変化としては全く無関係である。だから同一労働は同一時間内に常に同一価値を生むというより仕方ない」（経評一四九頁）とすべきだと教授は主張される。同一労働は同一時間に常に同一の価値を生むといえるけれども、それが生産諸条件に応じて異なった使用価値を調達するのであり、かかる生産諸条件を捨象したとしても、それは生産力そのものを抽象化、一般化するのみであって、生産力の変化により、「商品価値あるいはその大きいさの単なる尺度としての労働時間」は商品一単位当りにつき変化するといわなければならない。教授が「生産諸条件（生産力）の捨象されている商品価値については、そもそも初めから生産力変化と価値変動の相関係数など問題になりようがないのである」（経評一四八頁）といわれるのも、もし生産力と生産諸条件についての同一視ないし、曲解がなければ、教授のような誤った主張はさけられたに違いないのである。

五

教授は「抽象的な価値につきその量 \parallel 大きいさを云為することはまだしも、さらにその尺度として労働時間を説くことが、経済学上、どれ程の意義をもちうるか疑問とする」（経評一四九頁）とされ、「価値尺度としての労働時間は、むしろなくもがなの余計な構成概念であろうが、これに反し、金重量単位（オンス）はまったく現実的

な価値尺度であつて、それは金が時間と異なり、人間労働の生産物だからに外ならない」（同上、一四九頁）と主張される。

価値の大きさを時間ではかるよりも、金重量単位ではかるべきだとされ、その理由として、金は人間労働の生産物だからとされている。価値の大きさをはかる価値尺度に金をもつて来られるのは金が人間労働の生産物だからであるが、それではかられるものも、人間労働の生産物だからという前提があるからこそ、かかる論理が成立するのであつて、重量で重量ははかれても、重量では人間の労働量を直接はかることは出来ない。だから金重量で労働量をはかられるとして「金重量単位はただに具体的な商品価値をあますことなく尺度するのみならず、現実的な金が商品価値を実現した場合には、商品価値の大きさを実際に手にとつてみせてくれる姿態である」（同上書一四九）といひるのは正に、はかるべき商品が単なる重量でなく労働生産物だということであり、かかる前提においてこそ、一方は労働の生産物としての金、他方は労働の生産物としての商品が交換され得るのである。金重量で商品価値が尺度されるとするためには、かかる前提があるのであつて、この前提をぬきにしては、金重量によつて他の異質物をはかることは出来ない。この点は教授も認めておきながら、この前提から出発せずに、いきなり、金重量をとりあげられているが、一定の金重量とそれに対象化された労働量とは金重量が同一である、それに対象化された労働量は変化しうるし、また金重量が変化しても、それに対象化された労働量は同一でありうる。このことは労働量が同一であっても、金重量は変化しうるし、労働量が変化しても金重量は同一でありうることを意味しており、金重量と労働量とは一方の増減は他方の増減を必然的に含んでいないことを物語る。そして、重量単位が他の商品価値を重量単位で表現しうるのは、労働量をそれらがいずれも含んでいるから

であるから、価値をはかるのは両者に共通する労働量であり、それが金重量単位で表現されるにすぎない。尺度するのは労働量であり、それを表現するのは金重量単位なのであって、金重量単位が直接、他の労働量をはかれるとするのは、その間に横たわる論理的前提を無視するもので、現象にとらわれて本質を見ない見解であるといわなければならない。

そして労働量は金にも一般商品にも対象化されているのであるから、その労働量を金重量で表現することが出来るとともに、労働量それ自体の増減は金重量単位の存否とは別に、金にも一般商品にも、生産力の変化により、生ずるのであり、生産力の変化によって、「社会的必要労働時間」は変化して商品価値において変化をもたらし、それが金重量単位で表現されることとなるのである。ここで労働量の存在を認める限りは、労働量それ自身の変動は、労働時間の大小とならざるを得ないのであるから、労働の生産物↓労働量を認める以上は、その大小が金重量単位で表現されるのと同じように、かかる労働量が労働時間によって増減するということも当然認められなければならない筈である。労働量における一方の表現現形を認めて、他方の表現現形を認めないというのは、金にとらわれすぎた教授の偏見とみるより仕方がないのである。

「だから金の重量単位(磅点、引用者)は本来的な価値尺度であつて、具体的な商品価値が労働時間による量的表現を許さないからこそ、諸商品は彼等の間で自からかかるものを外化し、測定したのである。そして金重量単位が商品価値を尺度しうるのは、価値形態において商品が自己の価値と金価値とを等置することと、およびその結果、金の生産過程にいて金価値が不変・固定的に生産されるためである。しかし単なる形態としての貨幣形態においては、この実存的根拠は消え失せるから、ここで金重量単位はあたかも自立的に商品価値を尺度し、直接

的に商品価値そのものに関連するようみえるのである」（同上書一五〇頁）といわれる教授の表現において、金はすべて「金の重量単位」としてとらえられているけれども、これは金を「金の重量単位」とすることに、金の価値尺度機能を価格の度量基準の中に吸収しようとする教授の主張より出ているものといえる。しかし、その根底には、金が労働の生産物なるが故に、他の商品価値を尺度し得るといふ考えが前提されているといわなければならない。

最後に教授は「金の固定的価値と生産力の変化との相関関係」（経評一五〇頁）についてのべられて、「産金業の主體的生産力は、自然的生産力と社会的生産力との合体されたもの」とされ、「両者は相殺しあつて全体としての金鉱業の主體的生産力をほぼ不変ならしめると考えても原理的に誤りではない」（同上書一五二頁）とされる。「だから金生産上問題なのは、その客体的、一般的生産力の変化が産金用諸商品価格（労働力の価格を含めて）にいかなる作用を及ぼすかということである」（同上書一五一頁）とされる。ここで客体的一般的生産力といわれるのは産金業を主體的生産力としてとらえられているところからみて、産金業以外の商品の生産力をさすものと解される。そしてこの「客体的、一般的生産力の変化が産金用諸商品価格をいかに、騰落せしめても、金鉱業資本はその騰落に応じ自然的生産力を調節し（騰貴すれば上鉱を、低落すれば貧鉱をそれぞれ採掘する）、一オンスの金は常に一オンスの価格（コスト）をもって生産されるよう規制するのであるから、金価値は客体的、一般的生産力の変化と無関係に不変・固定化されるのである」（同上書一五五頁）といわれる。ここで不変・固定化されるのは金価値であるのか、金価格（コスト）であるのか明らかにされなければならないが、教授によればここですず不変・固定化されるのは金価格（コスト）であつて、その内容は、他の商品の生産力の変化による価格変化に

対応して、金生産の自然的生産力を調節して、常に価格（コスト）としては、同じ水準において維持するというのであり、このようにして不変固定化される金価格は、教授によれば金価値の固定化なのである。ここで明らかに金価格と金価値の同一視があり、そこから金の価値尺度機能と価格の度量基準機能の同一視の見解につらなる。しかし、価値と価格は常に一致するものとは限らないことは教授も知っておられる通りである。しかし仮に価値と価格を教授のように同一視するとしても、金のコストを規制するためには、自然的生産力を調節して、それをおこなうとすれば、これは金の生産力を調節することなのであって、自然的生産力を調節することによる金生産力の変化は金価値もしくは費用価格に影響するからこそ、商品価格の騰落に依りて、金費用価格もしくは価値をそれに調節出来るのであり、いいかえれば生産力の変化による金価値の変化があるからこそ、商品価格の騰落によつて、それと交換される金価値もしくは費用価格を調節するために生産力を調節するということでもある。

教授は「金一オンスが常に一オンスの価格（コスト）をもつて生産されるということ、抽象的概念ではなく、正に現実そのものである。総じて金鉱業資本はその客体的、一般的生産力の変化に基づく金生産用諸商品価格（産金コスト）の変動に応じて、その主体的な自然的生産力を調整し（上鉱あるいは貧鉱の採掘）、かくしていれば現実的に生産諸条件（生産力）の変化を捨象し、これにより金価値の不変、固定化を実現しているのである」（同上書一五一頁）とされるが、現実的に生産力の変化を捨象しているが故に、金価値の不変、固定化を実現しているのではなく、逆に生産力の変化があるからこそ、それによつて金価値に変動が生じ、他の商品価値が変化しても、それに対応して金価値を調節出来るのであって、生産力の変化がなければ、商品価値の変動に対応して金価値を調節させることは不可能である。

教授が「労働時間という概念はマルクスが、抽象的な単純商品の価値量を規定するために現実的な資本家的商品の生産諸条件（生産力）を捨象して構成した抽象概念に外ならない」（同上書一五一頁）として労働時間は生産諸条件（生産力）を捨象して構成した抽象概念といわれているが、言葉は同じであっても、その場合「捨象して構成した」とする捨象が教授においては誤って解されているために、捨象して残るものは生産力の変化とは関係のない単なる労働時間とされているが、これは明らかかなあやまりであることは既に見た如くである。むしろ労働時間の中に生産力の変化が介入するからこそ、労働時間によって規定される商品一単位当りの価値に変化を生ずるのである。ここでも生産力と生産諸条件の同一視と、さらに捨象についての誤解にわざわざされた見解がみられる。現実的にも、理論的にも生産力の変化は価値に変化をもたらすといわなければならない。したがって金の価値は変化しても、価格の度量基準としての金は、金の価格として、金価値の変化とは別に不変的に固定化され得るといわなければならない。

そこで生産力の変化は価値に影響するが、価格の度量基準には影響しないから、価値尺度機能と価格の度量基準機能とはここでも明確に区別しなければならぬのである。